

遠隔地・分散開発における開発管理についての一考察

7G-2

千嶋 正幸 藤原 貞利 鈴木 健蔵 土井 武志
富士通エフ・アイ・ビー(株)

1. はじめに

通産省の調べによれば現在、日本のソフトウェア開発には4万人分ものバックログがあると報告されている。また、人事面においても地元指向の現象(現地採用やUターン希望者の急増)が顕著になってきている。これらを背景として、従来通り(近地集中型)の開発パワーの確保が増々困難となりつつある。

こうした状況下において今後、本社/支社/営業所あるいは関連・協力会社と連携強化による全国レベルでの共同開発形態すなわち遠隔地・分散型の開発方式【複数の開発拠点(遠隔地:離れた場所)で分散して開発される一つのシステムを中央で集中一元管理,統合する開発方式】の導入が促進すると予想される。

本稿では当開発方式での進捗・品質管理に当たっての基本的な考え方を述べると共に、管理のポイントを示し、それを具現化するための支援ツールについての考察を述べる。

2. 開発管理のポイント

「物理的制約(時間,距離)の克服」が開発管理のポイントである。遠隔地であるがために発生する問題点の具体例として

- (1)「進捗管理表」等で一方的報告で進捗を把握しようとする、現実の作業状況との差異が発生する。また、拠点毎に分散された情報の収集に時間が掛かり必要な時点で情報が利用出来ない。
- (2)開発拠点が分散していると、頻繁な会議の開催やヒヤリングによる進捗のチェックなどは移動時間や経費の両面から限界がある。

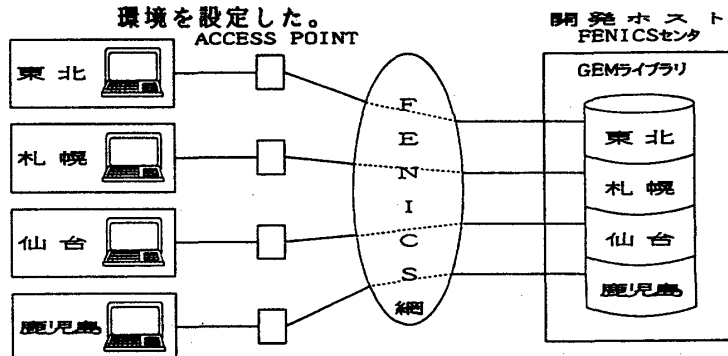
があるが、我々が特に考慮した留意事項と実施した対応方法は

- (1)定量的・客観的な情報の収集・評価
開発手法,レビューのやり方を標準化した後,各工程で,管理のための客観的かつ定量化した指標を設定する。作業者に負担を与えない情報収集および管理者に対しタイムリーに管理資料が提供できる仕組みを作る必要がある。
⇒ 支援ツールの活用(後述)

(2)開発は分散,管理は集中

分散している作業状況情報や管理情報を集中一元管理し評価する必要がある。

⇒富士通VAN(FENICS)を利用し開発拠点とは専用線で開発用ホストと接続し,同一の開発環境を設定した。



【図1】「開発環境」例

3. 進捗・品質管理について

3.1 基本的な考え方

- ①PLAN : 各工程の成果物を明確にするともに,その成果物に対して定量的な管理指標を選定する。
- ②DO : 選定した項目をプロジェクト要員に周知徹底させた後,開発作業に従事させる。
- ③CHECK : 管理指標値に対する予実差にて進捗・品質を評価する
- ④ACTION: 異常状態が発見されればヒヤリングを行い,対応策を施すなどの対処を行う

3.2 アラームポイントの設定

前項の「CHECK」に際し,各工程毎に標準的な更新回数,成果物に対する生産性,品質基準を設定しその基準値(アラームポイント)を基にして異常状態を検出できる様にする。また,異常状態検出時には,具体的な行動がとれるような,標準的な行動指針を作成する。

- *1 FENICS : Fujitsu Enhanced Information & Communication Service
- *2 GEM : Generalized Program Editing and Management facilities

